

## ITUの改革

国際電気通信連合 (ITU)  
事務総局長



うつみ よしお  
内海 善雄

### ITU改革を目指した改革委員会の発足

早いもので事務総局長に当選して4年半がたちました。12月開催予定の世界情報社会サミットを成功させることが、目下の最大の任務になっております。当選したときは、ITUをなんとか時代の要請にマッチした新しいITUにしなければいけないという思いが強く、自分ながら何かやらなければいけないと考えてジュネーブに赴任したわけです。

ITUというのは、国際機関のなかでは相当ハイレベルな仕事をやっていますし、職員もまじめに働いていますが、情報通信の世界で大変革が起きたことに対して対応しきれない部分があります。そのITUを、単なる技術的な細かいことをやる機関から、もっと大きな政策的なことをやる、時代の要請に合致したITUに変えたい、また、そう変わらないとITUの地盤は落ちる一方だと考えてきました。

そこで、4年前に当選してすぐ、これは日本流に言うところの改革委員会みたいなものですが、世界中の有名な大臣や民間企業の社長等に委員になっていただき、事務総局長発案の改革委員会というものを発足させました。そして、このミーティングを2回開催いたしまして、民間セクターの教化、政策事項への取り組み強化など、素晴らしい改革案を得ることができました。これはITUの将来のために自信を持って推進できるものだという意を強くし、次の理事会に臨んだわけです。

### トップクラスと実務家クラスでの改革に対する考え方の相違

ところが、理事会では、世界のそうそうたるメンバーが発言したことに対して、理事の人たちは、いったいそれにどういう合法性があるのかと非常に冷淡で、ほとんど検討されず

じまいでした。そして、改善のために理事会独自の改革のワーキンググループをつくり、議論を開始しました。

このワーキンググループに出席している人たちというのは、日本で言えば室長、係長、課長補佐といった実務家クラスの人たちですから、そこでは、大きな政策変更みたいなことよりもむしろ会議の仕方とか、技術的な中身をどう変えるかということを中心に何回も議論して改革案を作っています。その量たるや膨大なものとなりました。

そういう改革案を土台として、昨年11月にマラケシュで全権委員会議が開催されたわけですが、この全権委員会議で私はおかげさまで当選することができました。ただし、この全権委員会議の成果というのは、強いて言うなら私を当選させてくれたことぐらいで、そのほかに大きな決定はないのです。4週間あった全権委員会議のうち、前半2週間ぐらいは各国の大臣、局長クラスの人たちが出席され、日本からも片山大臣と局長が来られました。

これらのトップクラスが出席している間は、各国とも前向きな議論が出てくるのです。「ITUはこういうふうにならなきゃいけない」、「内海は素晴らしいことを推進しようとしているからみんなでサポートしていこう」という話が出てくるのですが、トップクラスが帰国すると、これが変わってしまうのです。実務家が残って議論をし始めると、180度違う議論になって、「事務総局長がやっていることはおかしい」という話になってしまうのです。

### 財政危機に陥るITU

全権委員会議中に各局長選挙や理事国選挙が行われましたが、イギリスから無線通信局長に立候補していた委員が落選し、ロシアの立候補者が当選しました。さらに驚いたことに、イギリスの代表は理事会の選挙にも落選しました。もともと分担金の単位が日本と同じく30単位だったイギリスは、前回のニースの全権委員会議で理事に落選した際に分担金を15単位に下げたのですが、今回の選挙を機に分担金を元に戻すという公約をして、手続きも開始していました。にもかかわらず、またも落選ということになると、公約にもかかわらず分担金の単位数をさらに下げて10単位にしてしまったのです。私たちには理解できないことが頻繁に起こるのが世界の現状です。日本のように「約束したことはあくまで守らなければいけない」という考え方だと、ばかな目を見るというのが国際情勢です。

イギリスがこのように分担金を下げますと、その影響は北欧や西欧諸国にも及び、イギリスとバランスをとって次々と

下げてきたわけですから。その結果、分担金の全体額が下がりました。途端にITUは財政危機に陥ることになりました。現在、職員数が全体で1,000人程度いるのですが、このうち100人以上をカットしないと給料が払えないという状態にあります。

### 国営・独占から民営・競争への変革

そのなかで、ITUも、国営・独占のカルテルであったITUから民営・競争という形に変貌していく必要があります。政府が自由化を進めていくという世の中が変わっていますから、ITUも変化しないと生きていけないというわけです。しかし、実際にITUに携わっている実務家は根本的な改革のことは全くと言っていいほど考えていません。

ITUに4年間いて分かったことは、日本の行革も同じでしょうが、正攻法で行革、行革と声高らかに叫んでも改革は進まないで、事実上、行革が起こったような状況にもっていったほうが早いのではないかとということです。

### WSISの開催で改革の一步を

それで取り組んでいるのがサミットなのです。ITUの150年近くの歴史の中で、国際連合の一員として国連総会の席もあるのですが、これまでの事務総局長は国連総会に出席したこともなかったのです。私はITUで初めて国連総会に出て、演説もしました。そういうことを行うことによって、ITUの地位を向上させ、世界中にITUを認知してもらう必要があると思っています。

サミットはまさに国の元首が集まる会議ですが、このサミットの第1フェーズを12月にジュネーブで開催し、2005年にはチュニジアで開催することになっています。その開催の準備をITU事務局が担当し、私が中心になってやっていますが、これまで各国の郵政関係の役人たちが実現できなかったことを、ITUが中心になってサミットを開催し、情報通信はいかにあるべきかということ論議するということです。

現時点で、30数カ国の元首が出席する予定であり、まだ返事の来ていないアジア、先進国も含めれば相当数の元首による会議が行われると思います。このサミットが成功すれば、改革に反対している人たちに対し、言葉では悪いですが、ひと泡吹かせることができるのではないかと考えているのです。

しかし、このサミットに対する予算も全くゼロ円しかない

のです。実は寄付金だけでサミットを開催することを3年ほど前に考えたことがありまして、当時はまだ経済状況がこれほど悪化すると思いませんでしたから、寄付金も集まるのではないかと予測していました。現時点で、民間企業からの寄付金は、ドコモからいただいたものぐらいで、非常に厳しい状況です。

### 国際機関の長として日本の国に役立つために

振り返ってみますと、9年以上前になりますが、京都のITU全権委員会議で議長をやるように言われたときには、それまで全権委員会議に出席したこともない自分にそのような大役が務まるのだろうかかと心配でした。成功するためには世界の人々との人脈を太くする必要があると考え、できるだけ数多くの国際会議に出席して、なんとか京都の国際会議も成功裏に終わらせることができました。事務局長に当選したときも、当時の課長補佐や審議官と3人でジュネーブに乗り込み、何も分からないところから仕事を開始したわけです。最初の1カ月は、夜寝る暇もありませんでした。

現在はそういうところから脱却して、各国の元首たちについても会うチャンスをつくっていただける立場にまでなってきました。振り返ってみると、よくここまで来たものだと実感しています。皆様から大変なご支援をいただきまして、ここまで来られたわけです。なんとか今回のサミットが成功できれば、ITUに対する皆様方の見方も大きく変わるのではないかと思います。

それよりも、各国の元首が情報通信について、初めて世界中でまともに議論をするということが画期的なことなのですが、元首クラスだけではなく、企業のトップクラス、あるいはNGOの方々が一つのテーブルで情報通信を議論する。さらに、さまざまなサイドイベントも開催されます。その事務局を務めるITUで実際に仕事を進めることを考えますと、身の引き締まる思いです。こういうことに携われるようになったのも、ここにおいてになる皆様方のご支援をいただいたおかげだと思い、大変感謝しております。

先日、ユネスコの松浦局長とも話したのですが、日本人が国際機関の長になる機会などそうそうあるわけではないし、お互いに大変な役を与えられたものだと言いつつ、お互いに大変な役を与えられたものだと言いつつ、このようにチャンスに十分認識して、日本のために役立つように働きたいと思っています。

(8月4日 第322回ITUクラブ特別例会より)